

2025.5.11.

「神のよって生まれた者たち」

旧約 イザヤ書 40章 3～5節

新約 ヨハネによる福音書 1章6～13節

1. はじめに

先週から、ヨハネによる福音書から御言葉を受けています。先週は「**初めに言があった。**」という有名な御言葉から始まる、この福音書の冒頭の所から御言葉を受けました。そして、この「言」とは神の御子である「キリスト」のことであり、このキリストは全てのものが造られる前からおられ、全てのものを造られたお方であることを教えられました。更にこのキリストに命があり、まことの光であられることを教えられました。私共がまことの命、永遠の命の希望を与えられ、光の中を歩む事が出来るのは、すべてキリストのお陰です。私共は自分で命を手に入れることは出来ませんし、まことの光も、まことの希望も自分で手に入れることも出来ません。どんな闇にも打ち勝つ強靱な希望は、永遠の命と共にあります。何故なら、目に見えるものに期待する希望の光は、肉体の死と共に消えてしまうからです。しかし、永遠の命の希望は、どんなものによっても私共から奪われることは決してありません。

2. 光を証する者：洗礼者ヨハネ

今朝私共に与えられた御言葉は、そのまことの光であるキリストを証する者として「ヨハネ」が来たと告げます。ヨハネという名前の人は、聖書には何人か出てきますが、最初に出てくるのが「洗礼者ヨハネ」、イエス様に洗礼を授けた人です。今朝の聖書の箇所に出てくるのはこの「洗礼者ヨハネ」（バプテスマのヨハネとも言います）です。もう一人は「イエス様の弟子のヨハネ」です。12 弟子の中でもペトロ・ヤコブ・ヨハネの三人は、特にイエス様が特別な業をなさった時におそば近くにいた弟子で、ヤコブとヨハネは兄弟でした。このイエス様の弟子であるヨハネが、このヨハネによる福音を記したと、伝統的には考えられています。

6～8節を見てみましょう。「**1:6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。**

1:7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。 1:8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。」とあります。洗礼者ヨハネは、まことの光であるキリストを証するため、全ての人がキリストを信じるようになるために来しました。ヨハネ自身は、キリストではありません。でも、とても大切な役割を神様から与えられて来しました。それはキリストを証する、この方が神の御子・キリストであ

ることを指し示し、そのことを告げるためでした。

3. 洗礼者ヨハネ

しかし、どうして福音書はイエス・キリストご自身から語り始めないで、洗礼者ヨハネから語り始めたのでしょうか。この洗礼者ヨハネから書き始めるというのは、ヨハネによる福音書以外の三つの福音書マタイ・マルコ・ルカも同じです。どうして洗礼者ヨハネから記すのか？その理由は二つ考えられます。一つは、洗礼者ヨハネが大変ユダヤの人たちから支持されて、洗礼者ヨハネこそがキリストではないかという考える人たちがいたからです。洗礼者ヨハネは、ヨルダン川で「悔い改めの洗礼」を授けていました。彼は普通の姿をした人ではありません。異形の人です。彼は「らくだの毛衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。」(マルコ 1:6) と他の福音書では記されています。そして、彼のメッセージはとても激しい、厳しいものでした。

「悔い改めにふさわしい実を結べ。…斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」(マタイ 3:8～10) というものでした。おびたしい人たちがユダヤ全土から続々と彼のもとに人々はやってきました。そして、悔い改めて洗礼を受けたのです。それは実にセンセーショナルな出来事でした。当時のユダヤに宗教的な運動が、うねりのように起きたのです。洗礼者ヨハネを長い間待っていたメシア、キリストだと思った人も当然いたでしょう。しかし、そうではない。洗礼者ヨハネは、まことの光であるキリストではない。そのことをはっきりさせなければならぬということが一つ目の理由です。

もう一つの理由。こちらの方がより重要です。キリストはイエス様として来られたのですけれど、それは突然、何の前触れもなく来られたのではなくて、洗礼者ヨハネがまことの光である方の先触れとして来て、次に来られるイエス様の道を備えた。そして、この洗礼者ヨハネこそ預言者イザヤが預言していた「荒れ野の声」なのだ。つまり、洗礼者ヨハネのことを記すことによって、イエス・キリストというお方が、神様の永遠のご計画によってこられたまことの光、救い主キリストであることを明らかにしようとした。先ほどお読みしましたイザヤ 40 章、今ここについて丁寧に見ていくとまはないのですが、これは紀元前 6 世紀、バビロン捕囚の苦しみの中にあったユダの人達に告げられた言葉です。イザヤは「**40:3 呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え／わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。 40:4 谷はすべて身を起こし、山と丘は身を低くせよ。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。**」と告げました。神様が来られる。その為に広い道を通せ。そう荒れ野の声が告げる。この道は王の道です。戦いに勝利した王が、人々の前に凱行進をするために造られる道路です。片側二車線、三車線なんてものじゃありません。イメージとしては道幅 100 メートルにもなる道路です。山を削り、谷を埋めて、荒れ野に道を通す。そこに、まことの王、勝利の王、神の御子、キリストが来られる。

洗礼者ヨハネは、この道を備える者として神様から遣わされてきたということです。イエス様が来られたのは、たまたま、偶然、その時に来られたのではない。神様の永遠のご計画の成就として来られた。そのことを洗礼者ヨハネの存在が示しているということです。

4. 受け入れられないキリスト

では、その神様のご計画の中で洗礼者ヨハネの後に来られたキリストは、人々に受け入れられ、人々はキリストの光に照らされ、新しい命に生きるようになったのでしょうか？聖書は、そうはならなかったと告げます。9～11節「**1:9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。 1:10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。 1:11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。**」ここではっきり「**世は言を認めなかった**」「**民は受け入れなかった**」と告げられています。これは、イエス様が十字架に架けられたことを示しています。キリストはイエス様としてこの世界に来られました。御自身が造られたこの世界の人たちが、神様の御心から離れ、自分の欲に引きずられ、神様に敵対し、罪の闇に沈んでいる。その人たちに、まことの光を与えるために、神様との交わりの中に生きることが出来るようにするために来られました。しかし、人々はキリストであるイエス様を、わが主・わが神として受け入れることはありませんでした。その結果が十字架です。この福音書は、その冒頭でイエス様として来られたキリストが、人々に受け入れられず、十字架に付けられるということを、この最初の所で、十字架という言葉は使わずに、印象的なイメージ豊かな言葉を用いて、それを暗示するように告げているわけです。

5. 神の子とされた恵み：福音

しかし、大切なことはこの後です。確かに、イエス様は十字架に架けられて殺されてしまいます。この福音書は、これからそこに至るまでのイエス様の言葉や業を語って行くことになります。しかし、この福音書が本当に語りたいこと、一番語りたいこと、伝えたいことはそこではありません。次です。「**1:12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。**」キリストを受け入れた人、イエス・キリストを神様と信じる人には「神の子」となる資格を与えられたということです。この「資格」と訳されている言葉は、「身分」とも訳せる言葉です。キリストは自分を受け入れた人、自分を神の御子として信じた人には神の子となる資格、神の子たる身分を与えられたというのです。これが福音です。

実にこれは度外れた恵みです。聖書の神様は、天と地とその中にある全てを造られたお方です。全世界、全宇宙の造り主であり、全てを御支配されている王です。その子どもである身分を与えられる。何ということでしょう。私共のどこを見ても、神様の子に相応しいところなど、どこに

もありません。この神の子たる資格、神の子たる身分は、私共がそれに相応しい力や智慧や愛や能力があるから与えられるのではありません。そもそも神様によってそれは「与えられる」のであって、自分の力や能力で「獲得する」「手に入れる」ということではありません。ただ、イエス様を受け入れる、信じる。それだけで、神様は私共を御自身の子どもとして受け入れてくださるというのです。これが福音です。この福音によって救いに与らせるために、キリストは来られました。それが神様の永遠のご計画、神様の御心です。

6. 神の子とされた望外な恵み

私はこの「神の子とされた」ということの恵みの大きさを、未だ十分に受け止め切れていません。それは、この恵みがあまりにも大きいからです。天地を造られた神様の子です。私共はしばしば自分の無力さ、小ささ、愚かさ、愛の無さに気付かされます。それにもかかわらず、神様は私共を「我が子よ」と受け入れ、ご自分の子として認めてくださる。私共が「神の子である」ということは、周りの人はきっと誰も認めてくれないでしょう。「あなたが神の子だって。私と同じ、ただの人間ではないか。どこが神の子か。どこに神の子と言える程の良きところがあるのか。頭がおかしいのではないか。」と言われるかもしれません。この「神の子とされた私」というのは、世の人たちが私共をその様に認めてくれるとか、認めてくれないとか、そんな事は全く関係ありません。そもそも、世の人たちはイエス様を神の子と認めることが出来なかった。だから、十字架に架けたのでしょ。イエス様さえも認めない世の人たちが、私共を神の子と認めるなんてことは有り得ません。しかし、世の人たちが誰一人私共を神の子として認めなかったとしても、私共は神の子なのです。どうしてでしょうか。それは、神様がその様に私共を認めてくださったからです。ここが大切な所です。誰一人世の人が認めなくても、神様が私共を御自身の子であると認めてくださるならば、私共は確かに神の子なのです。

神様が私共を我が子として受け入れてくださっている。それには確かな証拠があります。私共は祈りの中で、神様に向かって「父なる神様」と呼びかけます。「父よ」と呼べるのは「子」だけです。どんなに親しい近所の子どもでも、皆さんを「お父さん」「お母さん」とは呼ばないでしょう。呼ばれたら大変です。自分の子どもだけが「お父さん」と呼べるし、父や母だけが「息子よ」「娘よ」と呼べるわけです。私共が神様に向かって「父よ」と呼べるのは、私共が神の子だからです。しかも、神様御自身がその様に呼びなさい、呼んで良いと言って下さったからです。もう少し丁寧に申しますと、イエス様は神様に対して「父よ」と呼ばれました。子なるキリストなのですから、当然のことです。そのイエス様が私共に向かって、神様に対して「父よ」と呼びなさいと言って、「主の祈り」を与えてくださったわけです。天地の造り主である神様に向かって「父よ」と呼ぶことが出来る恵みの大きさに、私は時に圧倒されます。神様が私の父であると

いうことは、子なるキリストとは兄弟となったということでもあります。なんという光栄でしょう。そして、私共は互いに兄弟姉妹となりました。神様に向かって父と呼ぶということは、神様も又、私共を「我が子」としてご覧になり、「我が子」として私共に相對して下さっているということです。我が子をぞんざいに扱う親がいるのでしょうか？罪人である人間の親の中には、とんでもない親もたまにはいるでしょう。しかし、神様がそんなとんでもない親であるはずがありません。天地を造られ、全てを支配してくださっている神様が私共の父ならば、私共は何を恐れることがありますでしょうか。恐れるものなど何भीありません。父なる神様が、必ず一番良いようにしてくださるからです。これは本当のことです。

7. 一番良いようにしてくださる

しかし、現在とても苦しい状況の中にある人に「神様が一番良いようにしてくださる」と申しましても、単純にこのように信じてもらえることはないでしょう。「そんなに上手いこといくのか。だったら、どうして自分はこんな目に遭わなければならないのか。」という具合に反発されてしまうでしょう。確かに、目の前の現実、私を苦しめている状況は簡単に変わらないかもしれません。この「神様が必ず一番良いようにしてくださる。」というのは、信仰の言葉です。神様が私の父であられ、神様は私を我が子として受け止めてくださっているのですから、良くしてくださらないはずがない。信仰において、私共はその様に確信します。確かに、この現在の状況がどのようになっていくのか、私共には予測することは出来ません。私共は自分の予測や予想や見通しに基づいて、「一番良いようになる」というものではありません。神様が私の父だから、私は神様の子どもとしていただいているのだから、神様が良いようにしてくださる。何なのかは分かりませんが、必ず何かしてくださる。そのことを信じているということなのです。そう言いますと、「クリスチャンは脳天気だね。呑気で良いね。」そんな皮肉を言われるかもしれません。それは、言っている方は皮肉で言ったとしても、実は本当のことです。キリスト者は呑気で、脳天気な者です。だって、父なる神様が付いていてくださるのですから、何ともならないはずがない、そう素朴に信じているからです。

私共は、しばしば暗い明日を予想したり、上手く行かなかった時のことを考えます。「こうなったらどうしよう」「そうなったら困る」、そんな相談を受けることもあります。勿論、最悪の場合を想定して対策を考えておくことも大切かもしれません。でも、そのような悪い予想もそうそう当たるものではありません。何故なら、私共は明日を知らないからです。たいてい、全く考えてもいなかったような出来事が起きて、予想していなかったような展開になります。神様の子として生きるということは、この私共の思いを超えた神様の御業、それが具体的にどうということなのかは全く分からないのですけれど、それでも「一番良いようにしてくださる」父なる神様を信

頼して生きる。それがキリスト者に与えられた、新しい生き方なのでしょう。

8. 神によって生まれた

さて、そのように神様を「父よ」と呼ぶキリスト者はどのようにして誕生するのでしょうか。聖書はそれについてこう告げます。13 節「**1:13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。**」この「**血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく**」この言葉が私はとても好きです。私共が救われるのに、どの国の国民なのか、どの民族なのか、そんな事は全く関係ありません。人はどういう家に生まれたとか、どういう血筋であるとか、そんなことを気にしたり、誇りにしたりします。しかし、そんなものも私共が救われるためには、神様の子どもとしていただくためには、永遠の命をいただくためには、何の役にも立ちません。勿論、「キリスト者の家に生まれた」ということによって、私共の信仰の原点が形作られたという人はいるでしょう。そして、それはとてもありがたいことです。そこにも神様のご計画、御心というものが働いています。ですから、そのことに感謝することはとても大切です。しかし、「だから救いに与った」のではありません。私共の救いは「血筋によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず」です。私共の救いは、神様がただ恵みとして与えてくださいました。生まれた家、家系、家庭環境、誰の子であるか、そんなことは全く関係ありません。自分がこうなりたいと願ったからでもありません。ただ神様の恵み、ただ神様の選びによって私共は神様の子としていただきました。ちなみに、私の先祖、親戚にキリスト者は一人もおりませんでした。しかし、私は自分の両親の元に生まれたこと、育てられたことを、ありがたく感謝しています。私に信仰を教えることは出来ませんでしたけれど、やがてキリストの教会の門を叩くことになる、志や価値観や倫理観や興味といったものを育ててくれました。そして、神様は最後に「出会い」を与えてくださり、聖霊によって信仰を与え、救いへと導いてくださいました。この「出会い」というものは、私共が自分作ることが出来ない者です。これこそ、神様の御手の中で生かされている証拠だと言っても良いでしょう。夫婦も親子も友人も、出会いによって神様が与えてくださいました。そのようにして、私共は「神様の子」としていただくという、とてつもない恵みを与えていただきました。このことを共に感謝し、喜び、祈りを合わせたいと思います。

お祈りします。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、御言葉を通して、私共がただ信仰によって、あなた様の子としていただい

る恵みを想起させていただきました。その恵みに私共を招くために、イザヤの預言の成就としてあな様は洗礼者ヨハネを送り、イエス様の道備えとしました。イエス様の十字架の贖いによって私共は、ただ恵みによって神の子としていただきました。まことに、ありがとうございます。どうぞ私共が、あなた様の子として、健やかにあなた様を信頼し、あなた様の恵みの御手の中で御国に向かって歩んでいけますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン